

タイトル	<書評>仙波千枝著 『良妻賢母の世界近代日本女性史』
著者	塩谷，昌弘
引用	年報新入文学，6：188-192
発行日	2009-12-31

仙波千枝 著

『良妻賢母の世界 近代日本女性史』

(慶友社、二〇〇八年)

塩谷 昌弘

「良妻」も「賢母」もすでに稀少種で、しかもその種の存続などほとんど望まれていないかに見える現代に生きるここでの評者は、「良妻賢母の世界」という名を持つ本書を競々としながら開いた。読書の通例に従い「目次」、「あとがき」と読み進めると、本書が平成一八年一二月に北海学園大学に提出された博士論文に補足修正を加えたものであり、原題が「明治期の婦人像」であったことが知れる。ここにおいて限定化される「明治」という時代と「良妻賢母」なる語が結び付けられてみると、「毒婦」の方が好みに適っているなどと思っている者にとっては、やはり本書の題は恐ろしい。言うまでもなく、「良妻賢母」なる語が持つ「規範」的な臭いにはうんざりしているからだ。

ところが、怖ずくと本書を読み進めてみると、「規範」

について書かれてあるのかと思えば、どうやらそうではないらしいのだ。

本書の構成は以下のようになっている。

序章 「良妻賢母」とは何か

第一章 「女学」の雑誌の登場

第二章 女子教育における試み

第三章 家庭の担い手

第四章 女を描く——『女学世界』読者の営み

終章 「良妻賢母」を描く

序章では、はじめに「良妻賢母」に関する主要な先行研究が批判的に参照され、これまでの研究においては国家が要請する「良妻賢母」像にのみ重点が置かれてきたこと、また「良妻賢母」という語が女を抑圧するイデオロギーとして捉えられてきたことに対して、著者は「良妻賢母」たれと求められる中で生きる場を築き自己実現を果たそうした女の多様な営みを描き出すことを目的とする(八頁)と述べる。つまり「規範」としての「良妻賢母」ではなく、

近代日本に生きた実体／実態としての「良妻賢母」、あるいは「良妻賢母」という要請に応えようとしたナマの「女」を描き出そうというのだ。

そこで依拠されるのが「女学」の雑誌である。第一章では明治一〇年代以降に登場したこの「女学」の雑誌について検討される。近代日本の「女学」がいかんにして構築され、近代的な女のあり方がどのようにして示されたかが明らかにされる。とりわけ、明治三〇年代以降の「女学」の雑誌が「女学」を浸透させるといふ啓蒙的な役割だけではなく、読者である女たちが自ら投稿や投書という形で女としてのあり方を読者間で問いかけ合う場となっていたことを示し、それを近代日本の形成という課題を女たちが自らの問題としていたことの証左とする見解は、序章において否定された抑圧装置としての「良妻賢母」という通念への反証となっている。

第二章では、女子教育の試みが寄宿舎という生活の場から考察され、従来のような一部の私立学校だけではなく、裁縫女学校や女子職業学校などを含めた女学生の日常生活が検討される。ここでは開拓地であった札幌の学校が取り上げられ、身に着けた職能を以て生活の糧を得ることのできる女が「良妻賢母」として求められていたことが示され

ている。

第三章では、近代日本の女が社会の基礎である家庭においてどのような役割を期待されていたのかが検証される。ここに示された女は「一家団欒」の形成の担い手としての地位を築き、勤儉と忍従を求める規範としての「女大学」を乗り越える存在である。しかし一方で、こうした女の営みが所謂「イエ」を支えるという意識に基づいていることも指摘されている。

と、ここまで読み進めてみて、冒頭「良妻」も「賢母」も稀少種などと嘯いた評者は、この「良妻賢母の世界」という名を持つ書物に描き出された「良妻賢母」が、現在においても少しも稀少種ではないということに気付かされてくる。恰も一〇〇年に一度と呼ばれる経済危機に見舞われ、内助の功などとは言っていらぬ時代である。高校を中退して働く子があり、自殺しかねない夫がいる。であるならば、自ら働き、生活の糧を得ようとする女たちは、むしろ溢れかえっているようにも思われる現代は「良妻賢母」の繁栄期なのかもしれない。

とまれ、こうした現代の「風景」のパスベクトイブを本書を通して眺めてみると、第四章において記述される女

たちの営みに私（たち）は既視感を覚えるに違いない。

本書で最も紙幅が費やされ、内容的にも卓抜な第四章は「女学」の雑誌、とりわけ『女学世界』（明治三四年創刊）

の読者の動向を中心に論述される。『女学世界』は本書が扱う「女学」の雑誌の中でも主要な資料であり、これまで見てきた前三章においても繰り返し参看されている。この『女学世界』には投書・投稿欄が設けられている。第一章では、その投書・投稿欄のなかで女たちが「良妻賢母」という規範を受け止め、自らそのようなあり方を実践しているとしていたことが明らかにされたわけだが、本章では読者同士が投書を通じて交流し、生活上の悩みを打ち明けて情報交換をする読者や、書物の貸し借りや植物の種子の交換などを行う読者がいたことが明らかにされる。さらに明治四十年代に入ると『青鞥』（明治四四年創刊）の影響で「新しい女」に関する投稿・投書が見られるようになり、そこから『女学世界』と『青鞥』の読者の差異が明示される。しかし、何といても本章において特記さるべきは「寄書家」の内藤千代子に焦点を当てたことだろう。「寄書家」とは懸賞文などで入賞を繰り返して、投稿欄とは別に小説などの作品が掲載されていた読者のことで、この「寄書家」の中でも『女学世界』において最大の人気を博したのが内

藤千代子であった。本章では内藤の「生ひ立ちの記」を中心に、雑誌に投稿し、小説家となった内藤の軌跡が示される。

それによると幼少期、内藤は学校には通わせてもらえず、父親から漢籍の素読や手習いを教えられたという。しかし、その父親も十二歳のときに亡くなってしまい、裁縫塾に通いながら、興味を抱いていた雑誌への投稿をしていた。

著者は『生ひ立ちの記』にある「欲しいものも沢山あったけれど、お金はみんな母様にあげてしまった。苦しい年末の家計の上には、それがどれほどの緩和剤となつたでせう、のびくと眉をひらいて、おさへてもおさへても包み切れぬ歓喜と、小さな誇りとが私の胸に躍つてあました」（一四九頁）という記述について、内藤がかつて抱いたという「女でも立派なもの」（一五〇頁）になるといふ思いは「懸賞文が評価されたうえに賞金を以て家計を支えるという役割を果たしたことにより実現したのであった」（一五〇頁）と述べている。

これは例えば『青鞥』系の作家で、内藤と同じく雑誌投稿から小説家となった吉屋信子が高等女学校出で、しかも父親が官吏であったことと比べてみれば、その違いは決定

的であろう。内藤においては、書くという行為が家庭を支える術だったのだ。こうした内藤の作品が、家庭において自ら生活の糧を得ようとする『女学世界』の読者に支持されたというのも当然であろう。この他に数人の「寄書家」の作品が検証され、そこから「良妻賢母」という規範を主体的に生きようとした女たちの多様な営みが描き出される。

終章では本書の成果と今後の課題が述べられる。提示された五つの課題を見る限り、著者の今後の研究への期待は高まる。

こうして本書を読み終えてみると、そこに描き出された女の姿の向こう側になにやら透けて見えてくるものがある。目を凝らして見るまでもなくそれは、近代日本の女の声を悲鳴としてではなく、喜びと誇りに満ちた声として受信しようとする著者の姿なのだ。一〇〇年前の遠い声を聞き極めることは容易なことではあるまい。「女学」の雑誌に真摯に向き合い、そこから聞こえてくる密やかな誇りの声に耳を傾けた著者だからこそ、「良妻賢母」という「規範」が女を抑圧していたという従来の見方に対して、主体的に生きた女たちの姿を活写し得たのだ。しかも、未だに一部の女性解放論者は「あれは悲鳴だ！」と喚いているのだ。

そのような怒号を退けて、静かに耳を澄ます著者の姿勢に共感を覚えた。

ところで、先に『女学世界』を論じた第四章で示された女の営みに既視感を覚えるだろうと述べたが、その既視感の出所は私（たち）自身の姿だ。例えば現代のCGM (Consumer Generated Media) やUGC (User Created Content) といったネットコンテンツを利用する私（たち）は、口コミサイトで情報交換をし、ブログでは「私」を語り、コミュニティサイトでは話題や趣味を共有している。その私（たち）の営みは、一〇〇年前に雑誌を通して他の読者と交流した女たちの姿とほとんど重なるのではないだろうか。

そこで、例えば第四章で引用される内藤千代子の「霜月日記」の「まだ真の友の味と云ふもの知らぬ私は、こゝに私と同じく文学の花の香に酔ふて居る方を、かぎりなく慕はしく、しばしは魂の体を飛んだ」（一四八頁）という一節などを見ても、他者と繋がることの率直な喜びが表現されており、共感できる読者も多いのではないかと思われる。

もちろん「魂の体を飛んだ」という霊的な恍惚感が単な

る言葉の綾でないとしたら、それこそ全体主義がもたらす高揚感ではないかと言われかねないだろうし、そのような見解もまたある程度は説得力を持ち得るかに見える現代に生きるここでの評者は、しかし、それでも内藤の率直な喜びに、「自己実現」しようとする女の営みとは違った「生の喜びのようなものを感じるのである。

いづれにしても、現代の私（たち）が一〇〇年前の女たちと共有し得る何ものかが本書にはある。その意味で極めてアクチュアルな書物であると言えよう。そして、現代のコンピュータ技術を以ってしても、一〇〇年前の「良妻賢母」たちにアクセスすることは不可能なのだから、さしあたり、その技術が開発されるまでの間、本書がそのポータルサイトとなるであろう。

（しおやまさひろ・日本文化専攻博士課程三年）